

専徳寺報

第450号

令和2年1月10日発行
浄土真宗本願寺派
専徳寺

ついたち礼拝

【月のはじまりはお寺から】午前9時より45分間。正信偈和讃・法話。どなたでもお参りできます。

〒740-0044 岩国市通津2764
☎0827-38-1124 FAX38-1000

<http://sentokuji-iwakuni.net/>

専徳寺

検索

御正忌報恩講法要

御案内

ご開山・親鸞聖人のご遺徳を偲ぶ、一年で最も大切な法要です。万障くりあわせてどうぞご参詣ください。

日時

1月23日(木)	昼1時半～3時半
24日(金)	昼1時半～3時半 夜7時半～9時20分
25日(土)	昼1時半～3時半

講師

23日・24日…本願寺布教使・輔教
紫藤 常昭 師 (福岡市)
25日…前住職

◆お斎料は500円、地区割りは

23日…灘 地区 (11時半～13時)
24日…通津地区 (11時半～13時)

※25日はお斎はありません。



◆御伝鈔拝読：24日昼座と夜座
親鸞聖人のご生涯を曾孫の覚如上人が書きつづられた『御伝鈔』を拝読します。

◆大速夜と万灯会 24日夜座
聖人のご臨終を偲ぶ厳粛な法座です。

◆座談会：24日夜座
昨年同様、住職と前住職でご質問にお答えしたいと思います。

◆仏具回収…ご家庭でご不用となった仏具(お念珠、仏壇の荘厳具等)を回収いたします。

◆「2020年カレンダー」…まだお持ちでない方はご自由におとりください。

◆「私の仏事暦2020」…ご自由におとりください。

●聖典、聴聞カードもお忘れなく。

●法話中の帳場受付はお休みです。



ついたち礼拝 (平成31年・令和元年)

【参詣者名】

末広皓子、村中久子、白田憲光、岡崎幸雄、原多信子、河本多喜子、半田洋美、上田シマ子、岩重敦子、村井君江、伊原久代、野原寛子、水上三千代、稲本順子、梶本美代子、土井一生、佐倉裕子、森上博之、小方基史、伊藤真由美、下瀬光子、森上敏雄、森山梭一、岡部美代子、小島由美子、重村康子、米村悦雄、廣木昭美、兼国幸満、兼国京子 (30名)

2012年から始まった毎月一日、朝九時から「ついたち礼拝」です。ご参加、有り難うございました。

如来・人・言葉 115

五つの眼

在家仏教協会初代会長

加藤 辨三郎

私は、若いころはだいの仏教ざらいであつた。それがなんと今では「仏教ならでは夜もあけない」（仏教がなかったら何も物事が始まらない）しまつである。かわればわかるものかなと、じぶんながらあきれている。しかし、私は禅僧のように頓悟（ただちに悟りの境地に達する事）したのではむろんない。じわじわといつのまにかひきずりこまれたのだ。そのかわり目も、はつきりしない。上司の仰せで、やむなく説教を聞いているうちに、なるほどそうかなと、うなずかされた日のあつたことはたしかだが、その日とてもはつきりしないのである。けれどもその頃から、ようやく仏教の本を探し求めるようになった。最初に、私を仏教にひき入れた本は、金子大栄師の『人』であつた。いわば、これが私の入門の書である。

この本で私は、五眼（ごげん）ということばをはじめて知つた。眼に、「①肉眼（にくげん）、②天眼（てんげん）、③慧眼（えげん）、④法眼（ほうげん）、⑤仏眼（ぶつげん）」の五通りあるというのである。この眼の話が、そのまま、私の眼を

開いてくれる結果となつた。ほほえましい因縁といわなければなるまい。

①肉眼は、いうまでもなく私たちの顔についている眼、その特徴は外ばかり見えて内が見えないことだ。この眼だけにたよると、人間はおそらく、はてしなき欲望、いわれなきしつと、反省なき驕慢（きょうまん）におちいるであろう。

②天眼は天人のだそうだ。人間の肉眼では見えないものの見える眼らしい。それがどんなに小さかろうが、どんなに遠かろうが、または壁をへだてていようが見える。そういう眼である。だとすると、今日ではこれを科学の眼といいかえてもよかろう。現に今日では、遠くは十億光年の星を見ることもできれば、小さくは分子の構造までも知ることができる。壁をへだてるなどはいうもおろかテレビのスイッチを入れさえすれば、世界中のできごとを茶の間で見ることができるとはでないか。こうなつてくると、天人の眼もたじたじであろう。もっとも、天眼はひとの運命まで見えるというからその点ではまだ科学もいばれない。

ところが、それほど天眼にも大きな盲点があるという。自分自身を見ることができないことだ。これはおもしろい。科学は科学自身をかえり見ることができない。先へ先へと出るばかりである。その結果、人間が死滅しようが、地球が割れようが科学

の知つたことではない。さても恐ろしい眼よ。

③慧眼、これは読んで字のごとく、智慧の眼である。この眼に至つてはじめて、自分自身が見えてくるようだ。現象を見る場合でも、外ばかりでなく、その内側を見るのである。仏教の「色即是空」（この世の万物は形をもつが、その形は仮のもの、本質は空であり、不変のものではないという意）の智慧がこの眼によつて開かれたのであろう。私たちの生活の智慧もこの眼によつて開かれなければならない。

次に④法眼。これはどうやら涙にぬれた菩薩の眼のような、慈悲の眼とでも申しておこうか。

最後に⑤仏眼。これは上の四眼を残らず具備しているにちがいない。あるお経に「仏眼は四大海水のごとし（仏の眼は世界の海のようにひろびろとしてゐる）」とある。はじめてこれを読んだ時、私はずいぶん大げさな形容詞だと思つた。しかし、今日では、いみじくも仰せられるものかなと思つている。

〔「仏教と私」より〕

在家仏教協会のHP (<http://www.zaiko.jp>) には、「加藤辨三郎氏のページ」があり、「五つの眼」の他、多数のエッセイが掲載されています。

【補足・加藤辨三郎氏について】
【略歴】

明治32年（1899年）～昭和58年（1983年）。日本の実業家。協和醸酵工業（現・協和発酵キリン）会長。

戦後、ストレプトマイシンという技術をアメリカから導入し、日本を結核から守ったという功績があります。従三位勲一等工学博士。

若い頃は「宗教など社会と何の役に立つのか、科学から目をそらしている」と馬の耳に念仏状態で、仏教は厭世的、逃避的という先入観もあり、どうしても馴染めなかったそうです。しかし初めての聞法のご縁から実に20年、ようやく念仏の有り難さであったそうです。

【エピソード 祈りではない】

昭和25年頃、加藤は商用でアメリカに行きますが、乗っていた列車が脱線転覆して、軽傷を負います。そして、帰国後、NHKの「朝の訪問」に出たところ、アナウンサーが、加藤が仏教信者であることを知っていて、転覆事故にあったとき、念仏を称えたか、と質問しました。

これに対し、加藤は、「事故の瞬間も、傷を負ったと知ったときも念仏は称えなかった。ただ痛いだけだった」

た」

と答えました。

すると、アナウンサーは、

「重大故に遭いながらも、軽傷ですんだのも、念仏を称えていたからではないでしょうか」

と言いました。

そこで、加藤は、

「念仏をそういうふうに関己的に考えるのは、大きな間違い。自分も仏教を知るまえはそう考えていたが、この考えが、自分の仏教に対する考え方を大きく誤らせていた。」

念仏を称えたから怪我をしなかったか、病気が治ると考えるのは大きな間違い。

念仏とは、こうした考えとは逆で、どんな病氣、怪我をしようが、責任はだれにも転嫁しないで、いっさいの責任を自分に感ずるような世界だ。そして、どんな境遇にあっても、つねに感謝する、そういう心の境地だ。」

ということを語りました。

また加藤氏はこうも言われています。

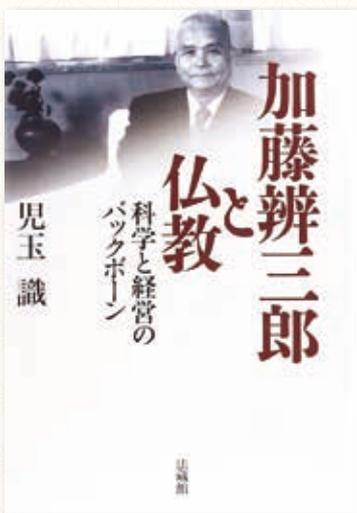
「私は、また宗教を、事業に利用しようなどとは、つゆほども思わない。利用されているような宗教があったら、ニセモノと
思っよるしい。宗教は、個人の頭の中に革命を起こさすものであるが、事業の繁栄

や、世界の平和に直接の関係はない。もし、あるとしたら、それは各個人個人の、もの考え方の転換からくる間接的、或いは相互的な影響からくるのであろう。

私は、率直に言うが、協和発酵が栄えますようにとか、ここにはストライキがおこりませんようにとかと仏に祈っているのではない。もともと、仏教には祈りというものが無いのである。祈りたいというふうな、その不足感を、みな自分自身の責任だと内省するのが、仏教である。

会社の成績が上がらないのも、ひととの和合ができないのも、ことごとくこれ、自分に責任ありと深く反省する、それが仏教に教えられてあることなのだ」

（以上、児玉識『加藤辨三郎と仏教―科学と経営のバックボーン―』より）



※筆者の児玉識氏は防府出身。前坊守の従兄弟です。昨年10月13日に往生されました。

寺内だより

●み仏にいだかれて〔葬儀勤修〕

9月19日御往生

南町

喪主 米本 芳人様 (82)
喪主 米本 忠孝様

11月4日御往生

尾津

喪主 村井百合子様 (87)
喪主 村井 浩司様

11月6日御往生

浪の浦

喪主 半田 佳恵様 (83)
喪主 半田 幸男様

11月8日御往生

青木

喪主 竹本八重子様 (73)
喪主 竹本 道成様

11月25日御往生

藤生

喪主 白木 壽様 (97)
喪主 白木 規晴様

12月17日御往生

保津

喪主 賀屋 廣志様 (94)
喪主 賀屋 利昭様

12月18日御往生

岩国

喪主 左伊木満夫様 (76)
喪主 左伊木和子様

12月30日御往生

山田

喪主 上田 登様 (91)
喪主 近藤美奈子様

12月31日御往生

山口

喪主 村岡 彰様 (48)
喪主 村岡真由子様

1月2日御往生

青木

喪主 山根 優様 (93)
喪主 山根 啓治様

●ご恩を偲び〔法事勤修〕 11月・12月

【通津】 吉柴伸一 25、松本敏嗣 1・50・100、

村岡隆 1、岡崎則生 13、河本多喜子 3、高

田紀子 1、村井君江 50、村中芳子 13、坪岡

規三 300、米本寿明 7、和泉嘉幾 3、【保津】

小川玲子 1、竹島進 7、賀屋光貴 13、穴水

百合子 1、赤崎しおり 7、赤崎謙一 1、谷

口康行 3、【青木】 森田幸一 1、村岡由美子

25・100、品川悦子 7、【黒磯】 松本順子 1、【市

内】 田巻源七 7、高山文字 7、古江益嵩 3、

村田博美 3、河本俊明 3、原民夫 1、村井

武生 13、米本敏男 1、野原明 13、【下松】 田

村俊輔 1、【塚】 藤中アヤ子 33・100

●おめでとうございます

法物下附式 (入仏式)

●11月27日 御本尊

青木 竹本 道成様

お給仕の慶び一入に存じます。

●ご報告いたします

法要余香 (永代経法要) 11月19・20日

【講師】成照星師。【参詣者】19日：昼座87名、

夜座33名、20日：昼座66名。【お鉢米】半田

正昭、吉柴伸一、岡迫博人、藤中征治。【ミ

カン】 白田憲光

専徳寺倶楽部冬の集い (12月14日)

一年間の汚れを落としました。境内が美しくよみがえりました。

【参加者】

(通津) 木戸久夫、中崎覚、浅井佐、岸井清市、

白田直則、白田憲光、半田正昭、増本真一、増本英一郎、吉柴伸一、(保津) 秋嶋進一、藤崎健治、藤本昭範、賀屋国昭、上田浩之、(青木) 森田幸一、(親睦会より) 小方基史、多山博通、松重吉英、森田京子

秋研修旅行 (専徳寺倶楽部主催)

【日時】 11月10日

【場所】 高林坊 (安芸高田市)、三次ワイナ

リー、奥田元宋・小由女美術館

【参加者 (27名)】 (専徳寺倶楽部) 小方基史、

半田正昭、増本真一、村中悟、森田幸一、

森上博之、(仏婦)

三井初美、末広敬子、

坪岡桂子、中本絹代、

岸井清市、塩中幸枝、

通谷みえ子、大田貞

子、土井智恵子、上

岡喜世美、梶本美代

子、半田洋美、村中

久子、末広美代子、

村河久美子、上田シ

マ子、水上三千代、

岩中みどり、村岡房

江、住職、坊守

秋晴れに恵まれ、

楽しい一日を過ごす

ことができました。



専徳寺納骨堂受付中 (パンフレットが本堂にあります)